

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷一十二第

行發日一月二十年四十四正大

論叢

財産税に於ける都鄙の對立……法學博士 神戸 正雄

人間愛の起源……教授 川村多實二

純正現象學の方法論及び問題論……文學博士 米田庄太郎

時論

勞働組合としての小作人組合……法學博士 河田 嗣郎

食料増殖問題と林業政策……法學博士 山本美越乃

說苑

岡山藩と大阪との海運……經濟學士 黒 正 巖

市町村の混合企業に就て……經濟學士 小山田 小七

歐洲に於ける家産運動及び家産制度……經濟學士 八木芳之助

雜錄

ヒルファディングの恐慌の意義について……經濟學士 谷口 吉彦

妙心寺の財政組織……經濟學士 中川與之助

法令

農林省統計報告規則・會社統計規則

附錄

本誌第二十一卷總目錄

(禁轉載)

雜 錄

ヒルファディングの『恐慌』の意義に就て

谷口吉彦

太陽の黒點が周期的に現はるゝことや、雨量や氣候に一定の周期的變化の起ることが、自然界に於ける動かすべからざる事實として存在するとしても、かくの如き自然法則は、既に幾千年來、少くとも幾百年來の長きに亘つて、嚴然として自然界に存在した筈であり、従つてそれが人類の生活に及ぼす影響も亦、かなり長きに亘つて存在し來つた筈である。然るに今日謂ふ所の經濟界の恐慌は、周知知らるゝ如く、資本家的生産の稍々一般化された十九世紀の前半以後に於て、始めて現はれ來つた現象である。それ故に恐慌と資本家的生産との間に、必然の關

係を發見せんとする多くの學者の努力が現はるゝに至つたことは、極めて當然のこと、言はねばならぬ。

ヒルファディングも亦、恐慌を以つて資本家的生産に必然の現象であるとす點に於て、他の多くの學者と異なるものではない。『資本家的生産が、好景氣及び不景氣といふ一の循環をなさねばならぬといふことは、經驗的法則である。』然らば謂ふ所の恐慌現象は、如何なる特徴を有つて現はるゝものであらうか？ 私の見る所では、ヒルファディングは少くとも之を二つの點に求める様である。その第一は、『販賣停滯』(Absatzstockung)である。『一の階段(好景氣)から他の階段(不景氣)への過渡には、危機が起る。好景氣の一定の瞬間に於て、價格下落の結果として、或る一連の生産部門に販賣停滯が起つて來る。販賣停滯と價格の下落とが擴がつて來て、生産が制限せられる……』²⁾のである。その第二は、かゝる現象が『周期的反覆』(periodische Wiederkehr)をなすといふ點である。かくて資

雜 錄 ヒルファディングの『恐慌』の意義に就て

第二十一卷 (第六號 一四九) 九五

1) Hilferding, Das Finanzkapital, (1923) S. 297.
2) a. a. O. S. 297.

本家社會の恐慌は、販賣停滯の周期的反覆であり、換言すれば『經濟法則的な恐慌』であると言ふ。併し乍ら、今日の恐慌が此の二つの特徴を有つて現はるゝことは、ヘルファディングを待つて始めて知らるゝ所でなく、従つて此の點までは、彼れの説を特徴づける何物をも發見し得ない。私の注意せんとする所は寧ろ以下述べんとする點にある。

二

今ま資本家社會の恐慌から、その周期的性質を抽象し去るときは、他の一特徴である販賣停滯が残る。此の販賣停滯の起り得る一の可能性は、販賣の存在——即ち貨幣の存在——にある。販賣停滯なくして販賣はあり得るけれども、販賣のない所に販賣停滯はあり得ないから、販賣は販賣停滯の起り得る可能的基礎であり、條件である。これヘルファディングがマルクス³⁾に従つて、『恐慌の一般的可能性は、商品が、商品及び貨幣といふ二重物たると同時に與へられる』⁴⁾となす所以である。貨幣の發生は、

貨幣の貯蓄を可能ならしめる。貨幣の貯蓄は購買の停滯であり、従つて販賣の停滯を意味する。『 $W_1 - G - W_2$ 』の過程は、商品 W_1 の實現した貨幣が商品 W_2 に實現しないために、停滯する。 W_2 は販賣されずに残り、かくて販賣停滯が起る』⁵⁾のである。

貨幣の發生従つて賣買の出現は、單に今日の資本家の恐慌の可能條件たるに止まらぬ。其は貨幣の存在する限りの社會に於て、販賣停滯の可能條件をなすこと勿論である。けれども此の可能が現實となるための原因と過程とは、社會の經濟的發展に適應して、各々異ならねばならぬ。さうしてそれが異なるに従つて、單なる販賣停滯は次第に質的發展をなして、今日の『經濟法則的な恐慌』となるのである。

例へば貨幣發生の當初に於て、それが單に流通手段としてのみ働いた時代に於ては、貨幣を珍重し之を一の財寶として貯藏せんとする個人的な個々の欲望でも、既によく販賣停滯を現實に出現せしむるであらう。かくの如き主觀的な

3) Das Kapital, I. S.

4) Hilferding, a. a. O. S. 297.

5) a. a. O. S. 297.

個々の個人的欲望を原因とし、貨幣貯藏の過程をとつて實現する販賣停滯は、『たゞ一の個々に孤立したる出來事』であり、『一商品の販賣停滯は、一の一般的な販賣停滯を意味しない』⁶⁾のである。然るに貨幣の機能が支拂手段にまで發展すると、『販賣の停滯は、既に約束せる支拂の遂行し得られないことを意味し、……支拂手段としての貨幣が作り上げた所の支拂義務の連鎖が破壊され、一點に於ける停滯は、他の總ての點に於ける停滯を續かせる。即ち停滯が一般的となる。それ故に流通信用は、生産部門に一の連帶責任を發展せしめ、部分的の販賣停滯が、一の一般的激變を與へる可能性を生せしめる』⁷⁾此の一般的停滯の可能を現實にまで導く所の原因は、資本金社會の以前にあつては、『特殊な、自然的若くは歴史的な、従つて經濟的見地から見れば偶然的な原因——例へば、凶作、早魃、流行病、戰爭の如き——から起る』⁸⁾従つて規則的な『周期的反復』をなさず、『經濟法則的な恐慌』を實現することは出來ない。と同時に

等の原因は、資本家的恐慌に於ける生産過剰とは反對に、生産不足を惹き起して、それが直接間接に販賣停滯を必然ならしむるに止まらず、致命的な『異變』⁹⁾をさへ惹起する。

三

流通信用が販賣停滯を一般的ならしめるといふのは、個々に對する共通、孤立に對する連鎖を意味するのであつて、部分に對する全體、狹隘に對する廣汎を意味するものではない。何故かといふに、商品販賣が社會的に一般化さるゝことは、資本家社會の成立を前提するからである。資本家社會の以前にあつては、『社會の新陳代謝のために絶対に必要な流通は、手工的生産によつて行はれ、其の他の欲望は、自給的生産によつて充たされる』¹⁰⁾から、商品販賣は、經濟生活の重要な一부를占むるに過ぎない。従つて此の如き社會に於ける販賣停滯は、一方に於て極めて限られたる範圍に起り得ると同時に、他方に於て其の停滯は絶対的停滯たることを得る。それは便不便の問題たり得るにし

6) a. a. O. S. 297.
 7) a. a. O. S. 297.
 8) a. a. O. S. 298.
 9) a. a. O. S. 298.
 10) Katastrophen, a. a. O. S. 298.
 11) a. a. O. S. 360.

ても、死活の問題たることは出来ない。即ち『資本家的生産が、自給のためにする生産の廣大な上層建築若くは地方的市場のためにする手工的生産に結び付いて居る以上、恐慌は、資本家的上層建築にのみ、その壓迫を加へる。』販賣停滯の起り得る範圍が狭小なる代りに、其の程度が深刻であり、其の行はるゝ限りの全範圍に亘つて『一定の期間、販賣を全く不可能ならしめる』¹²⁾ことが出来る。換言せば、『此の場合には、恐慌は、資本家的に經營せらるゝ生産の範圍に亘り、最大の打撃を齎し得る』¹³⁾のである。

然るに資本家社會の成立を意味する所の商品生産の一般化、従つて起る商品賣買の一般化は、一方に於て販賣停滯の起り得る範圍を擴大すると共に、他方に於て其の停滯を絶對的たらしむることは出来ない。『生産の進歩と共に、如何なる事情の下に於ても繼續されねばならぬ生産の部分も亦増加する。さうして之を繼續せねばならぬといふことが、生産及び流通行程の全然の停滯を制限する。』¹⁴⁾生きるためには買はね

ばならぬ社會にあつては、一定期間に亘る絶對的の販賣停滯は、死を意味するからである。それ故に恐慌が一般的に行はれ得ない間は、それは絶對的に行はれ得るけれども、恐慌の行はるゝ範圍が廣まれば廣まる程、それは完全に行はれ得ないといふ結果に到達する。此の事は、資本家社會に内在する矛盾の發展が、遂に此の社會の一般的崩壊に導く、といふ理論と如何なる關係に立つか、私の茲に明かにし得ざる所であるが、その事の誤りなき事實である證據として、ヘルファディングは次の如く謂ふ。『恐慌によつて蒙る打撃は、消費に貢獻する生産部門に於て比較的軽く、且つそれが必要な生活手段であればある程、従つて其の消費の動搖が少なければ少い程、その打撃は軽いものである』¹⁵⁾と。

四

かくの如き資本家社會に於ける恐慌の原因が何であるかを證明することは、自ら別の問題である。茲ではたゞ其れが、ヘルファディングに於て、此の社會に特有な生産事情に歸せられて

12) a. a. O. S. 360.
 * 資本家的恐慌ではない。
 13) a. a. O. S. 360.
 14) a. a. O. S. 360.
 15) a. a. O. S. 360.
 16) a. a. O. S. 360.

居ることを注意すれば足りる。恐慌を以つて資本家の經濟組織に特有の現象であるとなす多くの經濟學者も、此の點に來つて淘汰される。

『經濟學の皮相的であるといふことは、就中、次の點に現はれて居る。即ち彼等は産業的周期の變動期の單なる徴候に過ぎない所の信用の膨脹及び收縮をば、却つて其の原因となして居ることである』といふマルクスに従つて、『金利歩合の變動から景氣現象を説明して、反對に生産の關係から金融市場の現象を説明しないのが、近世恐慌論の殆んど總ての特徵である』と、彼れは非難する。なるほど『取引所恐慌は、金融市場及び信用關係に起る所の變動によつて、直接に惹起される』けれども、それは『一般的な商業及び工業恐慌』に對する『單なる兆候、前兆に過ぎない』。何故かと言ふに、取引所恐慌を直接に惹き起した金融市場の變動そのものが、生産に關する變動を原因として起つたものであり、金融市場の變動や取引所の恐慌は、單に一般的恐慌を現實に導く所の一の過程に過ぎないから

である。

かくて所謂恐慌は、資本家社會に固有のものであり、此の社會の成立によつて始めて出現したものであるが、併し其の萌芽形態は、既に古く貨幣の發生と共に存在し、それが種々の發展形態を經過して、今日の恐慌、資本家的恐慌——『經濟法則的な恐慌』——にまで發展したものである。商品が資本家社會に於て始めて出現したものでないのと同様に、恐慌も亦この社會に於て、忽焉として無から湧き出たものではない。従つて又、資本家社會そのもの、種々なる發展階段に應じて、恐慌も其の性質を變ずる筈である。此の問題は、彼れが恐慌を取扱へる最後の章に於て、『恐慌性質の變化、カルテルと恐慌』として考察する所である。資本家社會の發展するに従つて起る所の、資本信用の發展、企業組織の發展、國際經濟關係の交錯、金融資本家の覇權、カルテルの成立等、總て恐慌の現實への過程を變化せしむるものである。要するにヒルファディングに於て最も吾々の興味を惹く

17) Marx, Das kapital, I, S. 598.
18) Hilferding, a. a. O. S. 356.
19) a. a. O. S. 337.
20) a. a. O. S. 337.
21) a. a. O. S. 337.
22) a. a. O. S. 357.

點は、その概念の形式にある。恐慌を觀念するに當つて、平面的、固定的に墮することなく、立體的に、歴史的發展的に、之を把握せる點にある。これが彼れの恐慌論に於ける著しき一の特徴である。私は信ずる。